様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２６３９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2016
課題番号：２３７３０８２７

研究課題名（和文）幼児とのコミュニケーション能力を育む家庭科「触れ合い体験」学習プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a contacting with infants program for communication ability with infants

研究代表者
田甫　綾野（TAMPO, Ayano）

玉川大学・教育学部・准教授

研究者番号：００５８３４６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、家庭科における「触れ合い体験」学習を、家庭科教育における視点からだけではなく、幼児教育の視点からも意義あるものとするためのプログラムの構築を行なった。様々な幼児をめぐる世代間交流の参与観察の分析の結果、「身体的同調性」が高く、「共感性」が高い交流については、互恵性が高く、その後の活動や学びにも影響を与える交流となることが明らかとなった。そのためには、年少者の興味関心が高く、さらには年長者がその活動の魅力やおもしろさを実感し、異なる役割をもつのではなく〈共に活動を楽しむ〉ことが重要であると考察された。

研究成果の概要（英文）：This research focus on the quality of "contacting with infants program" in home economics education. Almost all research the program arguing in students learnings or skills, but it needs not only that but also early childhood care and education. Because reciprocity is important factor for intergenerational program.
In effect, analysis of many types of intergenerational program, reciprocal program needs " synchronism" and "sympathize". Furthermore infants interested in the contents of program, and students feel fun for the program.

研究分野：幼児教育学

キーワード：触れ合い体験　世代間交流　互恵性

１．研究開始当初の背景

（１）子育てをめぐる問題

自分の子どもとうまく関係が結べないことによる「育児不安」や「児童虐待」などが大きな問題となっており、これらの解決は緊急の社会的課題である。また出生率の増加をめざしてさまざまな対策がおこなわれてきたにもかかわらず、大きな成果がでないままである。

このような中で、学校教育における「子育て理解教育」(文部科学省：2004)や、家庭科における保育学習への期待が高まっている。具体的には実際に子どもとかかわる経験をうながすような授業内容が重視されるようになってきたといえるだろう。

（２）家庭科教育における保育学習

特に、青年期までに、日常生活の中で乳幼児とのかかわりをもつ経験が少ないことを受け、家庭科の学習指導要領(中学・高等学校)では、幼児との「触れ合い体験」を、すべての生徒が履修するべき内容と改訂されたところであった。そこでは、「触れ合い体験」を通じて、「幼児への関心を深め、かかわり方を工夫できる」(中学校)、「子どもと適切にかかわり、子どもとのコミュニケーション能力を高めることの重要性を理解させる」(高等学校)ことが求められている。つまり、幼児と「触れ合う」経験から、①乳幼児との適切なかかわり方を知り、②乳幼児とのコミュニケーションを図る能力を身に付けることが必要とされた。

２．研究の目的

岩田(2008)(2010)は、「養育者と乳児のノリの共有（身体が他者と同調してリズムを共有すること）は乳児の自我形成の基盤となるものである」にもかかわらず、消費社会はそれを阻害する方向に進んでいると指摘し、また、佐伯（2007）は乳幼児の発達には「共感」が重要であるにもかかわらず、現代社会の乳幼児の発達環境が「共感性」の発達を阻害していると指摘している。このように、現代社会では、乳幼児にとって必要なかかわり方を知らずに大人になる場合が多く、子どもの発達や子育てをめぐる様々な問題を生んでいる。これらのことから、青年期に幼児との「かかわり方」を学習することは、家庭科で求められている幼児とのコミュニケーション能力を育むことにつながり、ひいては将来の「育児不安」や「児童虐待」の抑制にもつながるといえよう。この「かかわり方」を学ぶということは、先述の先行研究が示しているように、「ノリを共有する(身体的同調)」体験や乳幼児に「共感」する体験を意図的に作っていくことが必要となる。それを実践する場として、幼児との「触れ合い体験」は有効な活動と位置付けられるだろう。

しかしながら、現在行われている多くの「触れ合い体験」、またこれらをめぐる先行研究では、活動の内容についてほとんど吟味されていない（吉川：2003）。先行研究では、「触れ合い体験」学習の効果を中学生へのアンケートのみから測定していることがほとんどであり、中学生の主観的な感想を効果としてとらえているものがほとんどである。

そこで、本研究では、幼児との「かかわり方」に着目し、中高生が幼児とのコミュニケーション能力を育むための「触れ合い体験」学習の新たなプログラムを開発することを目的とする。

３．研究の方法

本研究は家庭科における幼児との「触れ合い体験」学習プログラムを開発するために、幼児と異世代との交流のあり方について明らかにする。

まず、家庭科における「触れ合い体験学習」の実際の交流場面の参与観察を行い、どのような交流が質の高いかかわりを生んでいるのかについて明らかにする。

さらに、様々なタイプ(日常的交流、通年での複数回交流、イベント的単発交流)と、対象（小学生、中高生、高齢者）の幼児の世代間交流の場面を観察し、幼児とのコミュニケーションを育む上でふさわしいかかわり方を分析する。

４．研究成果

（１）家庭科における「触れ合い体験」学習

家庭科における「触れ合い体験」学習の参与観察を通して、交流には３つのタイプのプログラムがあることが明らかとなった。第一におもちゃ交流、第二に製作交流、第三におやつ作り交流である。

①　おもちゃ交流

最も多いのがおもちゃ交流で、これは中学生が作成したおもちゃを幼稚園に持参し、それを用いて遊ぶというプログラムである。この交流の特徴としては、幼児が〈遊ぶ人〉、中学生が〈遊ばせる人〉という役割が固定化されているということが挙げられた。中学生と幼児が「一緒に遊ぶ」「一緒に楽しむ」というのではなく〈遊ぶ―遊ばせる〉という構図になっており、両者が遊びを通して「ノリを共有する」という関係にはなりにくいことが明らかとなった。さらに、そのおもちゃのおもしろさを幼児、中学生ともに、十分に実感できておらず、幼児に「共感する」こともできていないことが明らかとなった。

②製作交流

製作交流では幼児と中学生の距離が近く、〈一緒に物を作る〉という点では「身体的同調性」が高く、また出来上がった喜びを「共感する」という側面も大きい。しかしながら、保育者が主導でプログラムが立てられることもあり中学生の主体性は必ずしも高いとは言えない。

③おやつ作り交流

おやつ作り交流は、クッキーを丸めるなど同じリズムで幼児と中学生がおかし作りを

進める姿が見られ、「身体的同調性」の高さが明らかとなった。また、最初は中学生が教えて幼児が見て真似ながらおやつを作っていくが、徐々に幼児自身も正統的参加者へと変化している姿が見られた。おやつを作り食べるという目標や期待が共通であることもあり、「共感性」も高く両者が楽しんで活動を行なっているグループが多く見られた。

	同調性	共感性
おもちゃ交流	・幼児と中学生の距離が遠い ・待っている時間が長い ・幼児は遊ばせてもらっている ・中学生は遊んでいない	・幼児の遊びの成功に共感する。
製作交流	・両者が同じものに向かっている ・全員が活動に参加している	・製作が完成したことを共に喜ぶ
おやつ交流	・両者が同じものに向かっている ・両者が同じ作業を行なっている	・おやつの造りの過程においてできていく喜びの共感。 ・おやつの完成を共に喜ぶ。 ・一緒に試食し楽しい時間過ごす。「おいしい」ことを共感する。

（２）交流の方法と「かかわりの質」

以上のように、交流活動はいくつかのプログラムがあり、プログラムによって交流の質に違いがあることが明らかとなった。このことについての妥当性を得るために、「触れ合い体験」学習の受け手側である幼稚園教諭にインタビューを行なった。

その結果交流のプログラム内容に関わらず、中学生と幼児が異なる役割を担うのではなく、中学生が自分たちもおもしろさを実感している遊びや活動が幼児にとっても満足度の高い交流になることが明らかとなった。本研究で得られた結果同様、幼児と中学生の関係が〈遊ぶ−遊ばせる〉というものではなく、〈一緒に楽しむ〉という関係がふさわしいことがわかった。そして、その場合に両者の「共感性」が高くなり、どの場限りではなく継続的な関係が築けたり、交流での経験がその後の保育の中に生かされたりすることが明らかとなった。

（３）様々な異年齢・異世代交流

以上のような中学校家庭科における「触れ合い体験」学習の事例分析から、異年齢、異世代交流における「かかわりの質」に注目し、幼児をめぐる他の交流についても観察対象を広げ、そこでの事例分析を行った。

まず、幼稚園での異年齢交流については、日常的に年少児と年長児が関わりをもっている幼稚園の場合、年少児が年長児の影響を受けて自分たちの遊びに取り入れていることが観察された。また保護者と幼児の関わりを親子の交流という枠に留めず、異世代交流として捉えられる実践も見られ、子育て支援との関係も明らかとなった。

その他にも、乳幼児と保護者と小学生の交流では、乳幼児と保護者との関わり方を小学生が「見て―まねる」ことができる場合や、関わり方を保護者が小学生にアドバイスする場合に「かかわりの質」が高くなることが明らかとなった。

また小学生と大学生の交流についても参与観察を行った。この交流は小学生が考えた遊びを大学生と楽しむという内容のものであったが、おもちゃを作った小学生は自分たちのおもちゃの楽しさを実感しており、大学生もそれを感じながら楽しんで交流することができていた。先述した幼児と中学生との「触れ合い体験」学習でのおもちゃ交流とは異なり、両者がおもちゃの楽しさを「共感」しながら、〈一緒に楽しむ〉ことができていたと言える。

（４）「かかわりの質」に注目した世代間交流の検証

様々な交流活動の参与観察を通して、交流の「かかわりの質」に注目した場合、〈一緒に楽しむ〉ということが重要であることが明らかとなった。そしてそのために重要なことは、当初仮説としていた「身体的同調性」と「共感性」であることが再確認された。そこで、中学校家庭科における「触れ合い体験」学習においても〈一緒に楽しむ〉〈共に遊ぶ〉ことを意識した指導を展開してもらった。

その結果、これまでの〈遊ぶ−遊ばせる〉という関係ではなく、〈共に遊ぶ〉ことを意識したおもちゃが製作され、そこでのかかわりは「身体的同調性」、「共感性」が高くなっていることが検証された。

さらに、「かかわりの質」に注目した幼児と大学生の交流活動を設定して、上の検証の妥当性を論証した。ここでは、①音楽を通しての交流と②造形活動を通しての交流の二つを設定した。①については、幼稚園での幼児の興味関心が楽器にあることを受け、音楽教育専攻の学生とのコンサートを中心とした交流を設定した。その結果、「身体的同調

性」「共感性」とも高い交流となり、その後の保育にも繋がる活動となっていた。これは間野（2010）のいう「互恵性」の高い交流であると言える。

一方、②については、研究代表者が内容を設定し、大学近隣の幼児と保護者を募って、学生との交流活動とした。ここでは「身体的同調性」は大学生によってその高低に差が見られ、「共感性」についても差が見られた。その理由として、活動自体は、同調性の高いものを設定したが、幼児の興味関心に沿ったのもではなかったこと、大学生も活動自体の魅力やおもしろさを十分に実感していなかったことがあげられる。これらのことから、活動内容のみならず、両者が活動に対して興味関心をもっていること、先導する方が（多くの場合年長者の側）その活動の魅力やおもしろさを十分に理解していることが重要であることが明らかとなった。

（５）まとめ

様々な交流活動の参与観察を行い、質の高い交流活動がどのような要素をもっているか明らかにすることができた。さらに、質の高い交流活動を設定する上での重要な点も明らかとなった。

仮説としてあげた「身体的同調性」と「共感性」は連動しており、「身体的同調性」が高いと「共感性」も高くなることが多いことがわかった。この両者の関係についての詳細な検討は今後の課題であるが、「身体的同調性」の高い活動を設定することが「かかわりの質」を保障するということについては検証することができた。しかしながら、そのためには、活動の内容の吟味のみならず、その活動について先導する側（多くの場合年長者）が楽しさを実感していることが重要であり、さらには年少者側の興味関心に即していることも重要な要素となることが明らかとなった。

両者が揃った交流では「互恵性」の高い交流が展開されており、その後の遊びや学びにもつながっていることが明らかとなった。世代間交流においては「互恵性」を保障することは重要であり、双方にとってのメリットを意識した活動を設定することが重要であることが確認された。

引用文献

＊佐伯胖（2007）『共感』ミネルヴァ書房
＊岩田遵子（2007）『現代社会における「子ども文化」成立の可能性』風間書房
＊岩田遵子（2010）「現代における乳幼児の生活の危機に大人はどう対処すべきか」日本教育方法学会編『子どもの生活現実にとりくむ教育方法』
＊吉川はる奈（2007）「中学生と大学生を対象とした保育学習における実践的研究」埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要NO6
＊間野百子（2010）「世代間の相互学習・相互支援の視点から」草野篤子編『世代間交流学の創造』あけび書房

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①田甫綾野「大学生と幼児との交流活動に関する質的研究-交流のあり方をめぐって―」玉川大学教育学部紀要「論叢 2016」2017 年（81-98）査読有
http://libds.tamagawa.ac.jp/dspace/handle/11078/6

②田甫綾野「幼稚園における保護者の園活動への主体的参加過程：在園児保護者への「子育て支援」を考える」山梨大学教育人間科学部紀要第１７巻 2016 年（153-165）査読無
http://opac.lib.yamanashi.ac.jp/opac/repository/1/29727/?lang=0&mode=0&opkey=R149720112431672&idx=2

③田甫綾野「「触れ合い体験」学習における中学生と幼児の「かかわりの質」について：保育者のインタビューを通して」山梨大学教育人間科学部紀要第１６巻 2015 年(149-156)査読無
http://opac.lib.yamanashi.ac.jp/opac/repository/1/29618/?lang=0&mode=0&opkey=R149720112431672&idx=1

④田甫綾野「中学校家庭科における幼児との触れ合い体験学習について：「かかわり」のあり方をめぐって」山梨大学教育人間科学部起要第１３巻 2012 年（149-158）査読無
http://opac.lib.yamanashi.ac.jp/opac/repository/1/29158/?lang=0&mode=0&opkey=R149720112431672&idx=3

〔学会発表〕（計５件）

①田甫綾野「大学生と幼児との交流活動に関する質的研究―交流のあり方をめぐって」日本保育学会第 69 回大会、2016 年 5 月 8 日、東京学芸大学（東京都小金井市）

②請川滋大、石川直樹、田甫綾野「自発性を尊重した活動・遊びを通しての集団の育ち―５歳児１年間の生活から」教育実践学会 2015 年 8 月 18 日、郡山女子大学（福島県郡山市）

③田甫綾野「M 幼稚園における保護者の園活動への主体的参加過程」日本子ども社会学会、2015 年 6 月 27 日、愛知教育大学（愛知県刈谷市）

④田甫綾野「乳児及び低年齢幼児を対象とした交流活動における「かかわり」のあり方について」日本家庭科教育学会例会 2014 年 11 月 15 日、東京学芸大学（東京都小金井市）

⑤田甫綾野「触れ合い体験学習における中学生と幼児の「かかわり」について―幼児教育の視点から考える」日本家庭科教育学会 65 回大会、2012 年 6 月 30 日、東京学芸大学（東

京都小金井市）

〔その他〕
ホームページ等
東書Ｅネット（会員限定ページ）
https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/kyokah/chu/gijutsu-katei/

６．研究組織
(1)研究代表者
田甫綾野（TAMPO,Ayano）
玉川大学・教育学部・准教授
研究者番号：00583460